

1.1.4 単体的圏

1.1.2 節と 1.1.3 節では, 高次圏論への基礎として位相的圏と単体的集合という 2 つの方法を見た. これらが等価であることを示すために, 3 つ目の基礎づけとして単体的圏を考える.

定義 1.1.4.1 (単体的圏). Set_Δ で豊穡された圏を単体的圏 (simplicial category) という. 単体的圏と単体的関手のなす圏を Cat_Δ と表す.

注意 1.1.4.2. 単体的圏 \mathcal{C} に対して, 構成 $[n] \mapsto \mathcal{C}_n$ は関手 $\Delta^{\text{op}} \rightarrow \text{Cat}$ を定める. 構成 $\mathcal{C} \mapsto ([n] \mapsto \mathcal{C}_n)$ は関手 $\text{Cat}_\Delta \rightarrow \text{Fun}(\Delta^{\text{op}}, \text{Cat})$ を定める. このとき, 次のプルバックの図式を得る.

$$\begin{array}{ccc} \text{Cat}_\Delta & \xrightarrow{\mathcal{C} \mapsto ([n] \mapsto \mathcal{C}_n)} & \text{Fun}(\Delta^{\text{op}}, \text{Cat}) \\ \text{Ob} \downarrow & \searrow & \downarrow \text{Ob} \\ \text{Set} & \longrightarrow & \text{Fun}(\Delta^{\text{op}}, \text{Set}) \end{array}$$

ここで, 下の水平線は集合 S に対して S に値をとる定値関手 $\Delta^{\text{op}} \rightarrow \text{Set}$ を与える対応である. つまり, 任意の単体的圏は対象 $[n] \mapsto \text{Ob}(\mathcal{C}_n)$ のなす台単体的集合が定値であるような Cat における単体的対象とみなすことができる. 特に, 関手 $\text{Cat}_\Delta \rightarrow \text{Fun}(\Delta^{\text{op}}, \text{Cat})$ は忠実充満である.

位相的圏と同様に, 単体的圏も高次圏のモデルとみることができる.

注意 1.1.4.3. \mathcal{C} を単体的圏とする. 単体的圏の任意の対象 X, Y に対して, 単体的集合 $\text{Map}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ が ∞ 圏のとき, \mathcal{C} は $(\infty, 2)$ 圏とみなすことができる. この本では, ファイブラント単体的圏, つまり単体的集合 $\text{Map}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ が Kan 複体であるような単体的圏のみを考える.

Set_Δ と \mathcal{CG} の間には幾何学的実現 $|-| : \text{Set}_\Delta \rightarrow \mathcal{CG}$ と特異単体関手 $\text{Sing} : \mathcal{CG} \rightarrow \text{Set}_\Delta$ が存在し, これらはともに有限直積と交換する. これらを用いて, 単体的圏から位相的圏, 位相的圏から単体的圏をそれぞれ構成することができる. 単体的圏 \mathcal{C} に対して, 位相的圏 $|\mathcal{C}|$ を次のように定義する.

- $|\mathcal{C}|$ の対象は \mathcal{C} の対象と同じ.
- $|\mathcal{C}|$ の任意の対象 X, Y に対して, $\text{Map}_{|\mathcal{C}|}(X, Y) := |\text{Map}_{\mathcal{C}}(X, Y)|$.
- $|\mathcal{C}|$ における射の合成は \mathcal{C} における射の合成に幾何学的実現を適応させて得られる対応.

同様に, 位相的圏の射空間に特異単体を作用させることで単体的圏を得る. 位相的圏 \mathcal{D} に対して, 単体的圏 $\text{Sing}\mathcal{D}$ を次のように定義する.

- $\text{Sing}\mathcal{D}$ の対象は \mathcal{D} と同じ.
- $\text{Sing}\mathcal{D}$ の任意の対象 X, Y に対して, $\text{Map}_{\text{Sing}\mathcal{D}}(X, Y) := \text{Sing}(\text{Map}_{\mathcal{D}}(X, Y))$.
- $\text{Sing}\mathcal{D}$ における射の合成は \mathcal{D} における射の合成に特異単体関手を適応させて得られる対応.

構成 $\mathcal{C} \mapsto |\mathcal{C}|$ と $\mathcal{D} \mapsto \text{Sing}\mathcal{D}$ はそれぞれ関手 $|-| : \text{Cat}_\Delta \rightarrow \text{Cat}_{\mathcal{T}\text{op}}$ と $\text{Sing} : \text{Cat}_{\mathcal{T}\text{op}} \rightarrow \text{Cat}_\Delta$ を

定める. これらの関手は $\mathcal{C}at_{\Delta}$ と $\mathcal{C}at_{\mathcal{T}op}$ の間の随伴を定める.

$$|-| : \mathcal{C}at_{\Delta} \rightleftarrows \mathcal{C}at_{\mathcal{T}op} : \text{Sing}$$

1.1.3 節で見たように, \mathcal{H} は $\mathcal{C}\mathcal{G}$ にすべての弱ホモトピー同値を添加した圏とみなせた. Set_{Δ} と $\mathcal{C}\mathcal{G}$ との等価性^{*1} から, \mathcal{H} は Set_{Δ} にすべての単体的集合の弱ホモトピー同値を添加した圏ともみなせる. よって, \mathcal{H} は単体的圏のホモトピー圏ともみなせる.

$\mathcal{C}\mathcal{G}$ と Set_{Δ} のホモトピー圏はともに \mathcal{H} とみなせるので, 任意の単体的圏 \mathcal{C} と位相的圏 \mathcal{D} に対して, 次の自然な同型が存在する.

$$h\mathcal{C} \cong h|\mathcal{C}|, \quad h\mathcal{D} \cong h\text{Sing}\mathcal{D}$$

よって, 位相的圏のホモトピー圏と単体的圏のホモトピー圏は同一視できる.

定義 1.1.4.4 (単体的圏の同値). $F : \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ を単体的関手とする. 誘導される関手 $hF : h\mathcal{C} \rightarrow h\mathcal{D}$ が \mathcal{H} 豊穡圏として圏同値のとき, F を同値 (equivalence) という.

単体的圏の関手 $\mathcal{C} \rightarrow \mathcal{C}'$ が同値であることと, 位相的圏の関手 $|\mathcal{C}| \rightarrow |\mathcal{C}'|$ が同値であることは同値である. 幾何学的実現と特異単体関手による $\mathcal{C}at_{\Delta}$ と $\mathcal{C}at_{\mathcal{T}op}$ の随伴の (余) 単位を考えると,

$$\mathcal{C} \rightarrow \text{Sing}|\mathcal{C}|, \quad |\text{Sing}\mathcal{D}| \rightarrow \mathcal{D}$$

はそれぞれのホモトピー圏において同型を定める. つまり, 単体的圏 \mathcal{C} を位相的圏 $|\mathcal{C}|$ で置き換えても, 位相的圏 \mathcal{D} を単体的圏 $\text{Sing}\mathcal{D}$ で置き換えてもよい. この意味で, 位相的圏の理論と単体的圏の理論は (高次圏として) 等価である. ^{*2}

^{*1} Set_{Δ} 上の Kan-Quillen モデル構造と $\mathcal{C}\mathcal{G}$ 上の Quillen モデル構造が Quillen 同値であるという意味である.

^{*2} $\mathcal{C}at_{\Delta}$ 上の Bergner モデル構造と $\mathcal{C}at_{\mathcal{T}op}$ 上の Bergner モデル構造が Quillen 同値であるという意味である.